

# 希望・期待、ときに失望—希望は燃える—

近藤良樹

## 1. 実践的で人間的な「希望」、傍観的で動物にも可能な「期待」

希望と期待は、好ましい未来の可能性をふまえて、その実現を願い求める。その点で、両者は、よく似ている。だが、期待する場合は、純粹に自然をその客体とできるし、「期待する」ことは、動物にもできるのに対して、少なくとも日本語の世界では、「希望する」主体は、人間以上の存在にかぎられ、希望の客体も、自由な人為に限定されているように思われる。

対象の方からいうと、期待では、「雨を期待している」というように、人間を介在させることなしに、直接に自然にも期待できる。だが、希望では、自然に向かって、「雨を希望する」とは言えない。

「雨がふる」という自然現象を希望の対象とはできない。かりに「雨を希望する」ということが可能なのだとすると、それは、人工降雨の類いを誰かに希望しているのである（英語の希望 hope は、期待や願望も意味するようで、（自然の）雨を「hope 希望」できる）。

その主体（主語）の方についても、期待は、希望よりは相当に広い。植物が雨を「期待する」ことは無理であるが、若干の未来を予期・予想できる能力があるものなら大丈夫で、蜘蛛が「虫の飛来を期待している」といえるし、犬や猫は、もっと高度に期待する能力をもつ。犬は、えさがそろそろもらえとか、散歩らしいと「期待」する。期待の対象は、感覚的にも予期可能なすぐ先の未来になり、飼い主をみて、その動きから散歩を見込み、予「期」でき、受動的に「待」ち望み、期待できる。だが、「希望する」能力は、犬や猫では、まだ無理である。飼い犬が、「もっと遠くまで散歩に連れて行って下さい」と「希望する」ことは、日本では許されていない。

（希望は、はるかなかなたを見る）期待は、この現在とそれに結ぶすぐ先の結果を見るのみだが、希望は、まず、かなたの（未来の）目的を描くことから始める。「期待する」犬は、飼い主がハーネスを手を持ったのを見て、それに連続する散歩を待ち構える。だが、散歩を「希望する」人間は、逆で、かなたの散歩（＝目的）を想起することからはじめて、そのために犬をお供にしようかと思い、ハーネスを探し出して犬をつないで、散歩に出かける準備をする。希望では、まずは、その現実のもとには現前していない目的を観念的に定立することからはじめる。希望は、かなたの「希」有のものを「望」み見る。はるかな希望などになると、何十年も先のことを想定して希望＝目的を観念において描き出す。はるかな先の希望の目的は、それに到るに多くの手段・ステップをもっているから、現在の出発点においては、しばしばそのかすかな気配も見出せないものになる。犬猫はもとより、子供にも、はるかな先の希望を描くことはむずかしい。

（希望は、低い可能性から出発してよい）しかも、希望の場合、その実現可能性が相当に低いものでも、実在的にその可能性があつて不可能でないと判断できたら、これを希望できる。若者は将来の仕事について、どんなものでも希望できる。可能性はほとんどなくても、不可能でないかぎりそれを目ざして第一歩を踏み出してみることができる。努力しだいでそのはるかな希望は、しだいに現実味を帯びてくる。現在からは、可能性のかすかにしか見出せないものをもしばしば希望とする。期待の場合は、そんなかすかな可能性では駄目で、現在の因のもとに明確にその結果を推測することができなくてはならない。犬は、飼い主が餌箱に近づいて、餌のもらえることが明確になって、

やっとな期待して尻尾をふる。ひとでも、期待は、現にある事実のもとでその帰結が見込めるようなところにいづく。受験の「広大合格への期待」は、現に広大受験で良い点をとって、その可能性が確かと自信のもてるときいう。だが、「広大希望」は、そうではない。高校入学時には、もう「広大希望です」ということができる。かつ、その希望の実現可能性は低くてよい。さしあたりは、不可能に近くてもよい。はるかな先であり、少しずつ可能性を高めて行ければ、やがて、希望は大いに達成可能となってくる。

**(希望は、目的論的展開)** 期待は、因のすぐ先に果を予期するだけの因果論にとどまるが、希望は、目的論的である。はるかな未来にまずは観念として目的をかかげ、それから現在の方向にとさかのぼって、目的のかなう諸手段をたどりながら現在まで帰るといふ観念のプロセスを先行させる。その後、このプロセスを実在的に逆にたどって希望の目的を実現するために、手もとの実在的手段に実際に働きかけることをはじめる。単純な目的的行動なら猫もとれる。猫が、ガラス戸の向こうにねずみを見つけて、直接的には、手の届かないことを知って、回り道をして出入り口にと遠のいて、外に出て、ねずみを追いかけるような場合である。そこの目的としてのねずみの捕獲を描いて、それのためには、一旦は、そこを離れて遠回りしなくてはならないと手段を選択して、この手段を媒介にして、目的としての捕獲に到る。ただし、この猫の目的的行動は、なお希望には遠くとどかない。希望は、目前にはない未来を描いて、そのはるかな先に高い理想となるような目的を定立する必要がある。

目的論的な営みは、犬猫ではまだ例外的であろうが、人間では、その生に基本的である。一々が目的論的になっているのが人間の生である。台所に行くにも、なんのためにいくのか(目的)を明確にしていく。年とって、台所にビールをとりに行つたものの「なんのために来たんだつたか?!」ということになると、人の根本能力の喪失を思つてショックを受けるぐらいに、目的的に日々生きている。感覚や欲求の刺激を受けても、それへの直接的反応をもってする生活は少なくなつており、それがあつても(例えば空腹)、一旦は、これから離れて媒介的になり、抽象的観念的な世界を描き知的な反省をへて反応していくのであり(すぐ食べるのではなく食事時間を想起する等)、その多くが目的論的対応になる。なかでも、人生をになうような希望は、はるかな理想・目的を描いたもので、高度に知的で社会的な目的論的営みになる。

**(希望は、自由な人為を対象とする)** この希望がその対象・客体とするものは、日本の場合は、自由な人為に限定される。期待は、ひとつさきの結果を予期・予想して見込むだけなので、因果的展開をする森羅万象をその対象にできる。だが、希望は、実践的で目的論的な営みになり、ひとが意欲しこれを実現していこうとするところに言う。意志・意欲がその成果を出せるような事柄を対象とする。自然のこゝと、必然・偶然のこゝとは、人為の自由にならないから、日本語にいう「希望」は、これを対象とはしない。明日の快晴を「期待する」ことはできるが、これを自由に出来ないかぎり、「希望する」ことはない。人為であつても、ひとの意志を受け付けない必然・偶然のものは、希望の対象とはならない。「ご希望をうけたまわります」と希望をかなえてあげられるのは、自分が自由に出来る事柄に限定される。実現不可能なことを知りながら「よろこんで、ご希望をうけたまわります」とはいえない。日本語の「希望」の対象は、かなえることの可能な実践的なものであり、自由な人為に限定される。

**(希望は、最高の価値物を観念的に目的として立てる)** 希望の目的は、卑近な希望は別として、人生論などで問題となるそれは、日々の目的のあり方からいって、それからさらに一層遠くに距離を

とったはるかな目的である。希望の対象は、「希」有の「望み」として、最高の目的であり、価値的にも、遥かかなたのものである。大学受験の「第一希望」は、自分に可能な最高の大学である。「希望の宝石」は、入手可能な最高の宝石である。ただし、夢や願望とちがい、現実的に叶えることの可能なものが希望の対象であり、現つの自分に可能な最高のものである。

希望は、最高のものを求める点、夢に等しいところがあるが、夢や単なる願望との決定的な違いは、希望が実現可能性を踏まえていることである。はるかな目的を観念において立てるのだが、それがこの現在のもとで可能であることを測っている。希望する者は、現実的にその目的にいたるための最初の実在的手段を現在のもとにもっていて、その実在的手段をにぎっている。そのことにおいて、希望は、夢とちがって実在的な世界に入り込みえて、実在的実践的に最終目的までを展開していくことが可能となるのである。

希望の目的は、実在世界での可能性をふまえつつ、その実現のための諸手段とともに、まずは観念的に立てられる。そして現在の実在的な手段（因）から、実在的現実を一步一步時間を踏みしめて未来の目的（果）へとたどっていくことになる。期待には、この希望の目的定立などの観念のみの先行過程は不要である。期待は、はじめからその関心を実在的な事実世界に留めたままで、現にある事実（因）をふまえて、事実として可能な一步先の結果を予期するだけである。

**（希望は、実践的で、意志・意欲に属する）**期待は、傍観的だが、希望は、本質的に実践的である。「教師になること」を「期待している」という場合、教師になるのは、周囲のだれかであり自分ではない。だが、「希望している」というときは、教師になるのは自分自身のことになろう。希望は希望する者の意志・意欲の問題であり、実践的なものになる。期待の根本は、認識にあり、希望のそれは、実践にある。

ひとが未来に描く遥かな希望は、それに自らが主体的にとりくみ、自身の人生をそれにかけて生きるものになる。「教師になる」希望を未来に向けて持つものは、教育学部の学生となって、その希望＝目的達成への道程をひたすらに歩む。はるかな未来を描く希望は、輝かしい未来を創造するのみにとどまらず、現在の充実した存在そのものをつくることにもなる。

**（希望は、ひとに希う）**希望にと自らが生きるのであるが、ただし、志す「志望」とちがい、自分だけで実践するには留まらない。希望は、ひとが社会的な共同存在であることを強く意識させるものになっている。希望は、どんな場合も、なんらかの形で誰かにと希望することが本質的である。ひとりする希望であっても、おそらくは、ひとりで勝手にすることを許してほしい、見守ってほしいと周囲に対して願うのが希望ではないか。

希望では、未来に希有の価値ある目的を描き、これを望み求めるが、同時に、そこには、だれかに希（こいねが）い乞い求める契機がある。単に自分の要求を一方向的に押し付けたり、周囲と無関係に自分ひとりで志すというものではない。「ケーキがほしい」とストレートにいうのとちがい、「ケーキを希望する」場合、日本語の希望では、間接目的語をもつ。ほしいという場合「ケーキを店員にほしい」とはいえないが、希望では「ケーキを店員に希望する」という。希望は、常にひとを前提し、これに希う。「請う」のであり、「願う」のであるから、丁寧で謙虚な姿勢をもって向かいあう。ただし、謙虚ではあっても、希望は、卑屈にはならない。「貴社への就職を希望しています」というのは、「雇ってください。お願いします。なんでもしますから！」と土下座するのと違い、背筋を伸ばしての意志表明である。可能なことは自分でという自力・自律の精神があり、おのれを省みつつ最高のものを目的にかかげるのであり、「哀願」などと異なって矜持・自尊の態度を崩すことはな

い。希望の担い手・関与者となる者に対して控え目にかまえ、かつその相互の自律・自主性を尊重し、その間で求めうる価値の程度を了解しあいながら、お願い願うといった高度で微妙な感覚が、日本の「希望」には求められる（なお、希望には、「ケーキを希望する」ような些細な「卑近な希望」から、人生に肝要な「はるかな希望」までがあるが、本稿がいうそれは、基本的には「はるかな希望」の方を想定している）。

## 2. 「希望」の実現がせまって、人は、これを「期待」する

ひとは、同じことについて、希望と期待をいう。就職活動について、希望し期待する。子供の将来について、希望し期待する。期待は犬でもできるが、希望は人間にのみ可能なことだとすると、ひとにおいて、まず期待があって、そのあとに希望が成立するのかということ、そうではなく、一つの事柄に関しては、その逆が両者の展開の順になる。

（期待は、すぐ先のことを見込むだけ）企業に就職しようと思うとき、願書をだして受験するまでは、「貴社に、就職を、希望します」というが、「期待します」とは言わない。期待は、面接を終えてからはじめて言えることである。筆記試験がうまくいったこと、面接も好感を持って受け止められたことをふまえ、そこから、推定できる帰結「合格」を思うことにある。因となるものがすでにそこにあって、それをもとに、生じつつある好ましい結果を予期し、そうなってほしいと思うことである。希望は、未来にまずは目的を立てることからはじめる目的論的な営みで、はるかな目的を描き得ない犬にはかなわないことである。だが、期待は、目的（結果）を目前にして今の状態（因・手段）からそれを見込むだけのもので、（自然のもとにも期待は言えるから、これを含めて）単純化していえば、実在的に原因・根拠が存在しているところから結果を予期しようというもので、すぐ鼻の先に結果の見えるような因をもつ場合には、犬にも十分できることになる。

こどもに酒造の老舗をついで欲しいと「希望する」親は、こどもがまだそれを受け入れていない時点では、期待はできない。はるかな未来に酒店を子供が引きつぎ営むすがたを描き、機会あるたびに子供にもそれを言い、希望とするのであるが、こどもが「いやだ」と言っているかぎり、後継は、「期待できない」と言わざるを得ない。期待は、その希望をこどもが肯定してやっと可能となることであり、大学で発酵学科ぐらいいに席をおくことになれば、それは、おおいに高まる。期待するときの現実が、酒店を引き継ぐという結果をもたらすような因・根拠となるものを有して、つまり、後継を了承したり、発酵学科に席をおくということをもって、そこから、よい帰結のなることを思い、そうなれと願うとき、期待が可能となる。

（先を知ろうとする「期待」と「信」のちがひ）期待は、いまの事実から、これを因として生じる結果を思うところにある。まだ結果は、生じておらず、なお、未知のことにとどまり、その予期・見込みは、「信じる」ことに近い。「信じる believe」とは「期待する expect」ことだということもある。信じる場合は、その未知にとどまる事柄を、必然でまちがいないものと断定し、その所与の情報への懐疑を停止し、これを真実と見なして受け入れる。そう思い込めるだけの可能性の高いものが信じられるということになる。だが、期待は、そう信じられるだけの高い可能性は必ずしもっていない。そうならない可能性も前提している。太陽が明日も東から昇ることは、みんな「確信」できることであるが、あす朝の太陽が雲ひとつなく輝いてのぼることは、よほどのことがないとわが国の場合、不確定であって、「確信」はできず、「期待」できるのみである。

期待する者は、確かと「信じる」のと違い、ことの生起を不確定・不確実とふまえつつ（但し、

観念＝目的にはじまる希望と違って、確かな事実の世界に終始とどまっている)、現在の事実から未来の事柄の生起を予期し、そうあってほしいと願う。期待は、自然についてもいうが、その展開の必然性の周知されているもの、つまりは、ことの確定しているものには言わない。期待は、不確定さをもっていることが前提になる。自分の期待するようにならないかも知れないという不安を交えて、「わくわく」するものがあっての期待である。「あすも太陽が昇る」ことは、確定的で、不確定でわくわくさせるようなものは何もないから、これを期待する者はいない。

なお、英語の expect は、「信」と同様に、好悪を問わず予期・見込みの状態にいだかれるものようで、否定的な不快な結果についても、expect(期待)する。“He expects the bus to be late”は、「かれは、バスが遅れることを期待している」ということだが、ふつうには、バスが遅れるにちがいないと見込み、覚悟しているという意味である。だが、日本語では、「信じる」場合は、好ましくない帰結を確信する場合もいうが、「期待」は、その帰結が自分にとって肯定的な、好ましいものごとについてのみ、いう。「まちががなく不採用だろう」とか、「こどもは酒店をつぐことはありえないだろう」と、英語では、expect(期待)するのだろうが、日本人は、こういう好ましくないことについては、「期待」しない。

(傍観としての期待) 好ましいことを日本の期待は待ち望むのであるけれども、希望のように、自身がこれに直接に手を下して関与するようなことはしない。因から果へと展開する過程を傍観し(人間的なものの場合、目的的な活動になるから、その中での因果ということになる。つまり、手段を原因とし、目的を結果とする因果関係となる)、せいぜいそれへの影響を与えるぐらいにとどめるのが期待である。酒店を継がせたい親の期待も、その子供の自主性を尊重し、それを支えるぐらいとし、これを見守るのみである。自分から独立した干渉無用の客観的世界を、そういうものと前提して理解していく態度は、科学や学問一般の態度となるが、「信じる」と同様に、「期待」は、この客観的態度に近いところの有り様となるように思われる。ひとの期待は、受動的で傍観者にと自己を制限したものになる。

しかし、「正社員にしてもらうことを期待して、主任に贈り物をする」とか、「果物の実がたくさんなるのを期待して、肥料をたくさんやる」という期待では、希望と同様に目的を描いてそのための手段として「贈り物」をし「肥料をやる」ということであって、能動的主体的に見える。だが、正社員に取り立ててくれることを「期待」して主任に贈り物をする場合、「贈り物」＝手段＝因をもって、きっといい方に動いてくれるに違いないと想像し、それが大きければ「わくわく」もするであろうが、ことの展開自体は、主任に任せ傍観的になるのではないか。これに対して、「正社員」を「希望する」者の場合は、その目的を内外に明確にし、贈り物はその手段のひとつと位置づけ、別の手段をさがしたり、「贈り物」でも、希望をかなえるにはもっと必要かもとさぐったり、重ねて主任に依頼し、あるいは催促していくことになる。第一、正社員になるための努力とか意欲をしっかりもっての希望であろう。だが、「期待する」だけの場合、それらのことはせず、動いてくれそうな今の主任に贈り物をしてその気持ち(因)をひきたてることはするものの、それ以上はせず、後は任せて、よい結果のなることを、そばから願っているのみであろう。あるいは、自分のために動いてくれないかもしれないと思っても、期待では、そうでないことを願うのみであり、直接的な働きかけはせず、傍観的にとどまるのではないか。

逆に手段(因)と目的(結果)が確実な結びつきをなすものの場合を考えてみよう。遠方からの商品の購入では、「商品送付」(＝目的＝結果)を求めて、「送金」(＝手段＝因)をするが、「希望」は、

商品送付がまちがいなく実行されることを前提にして、もし、それが実行されない場合、督促する。だが、「商品送付」を「期待する」のみの場合は、「送金」しても商品を送ってこないかもしれないと傍観的であろう。送付が実行されなくても、仕方がないと思っているのが「期待」であろう。もちろん、そうであるから、送金する者は、一般的には、「期待する」のではなく、「希望する」のである。「期待」をその場面にいうとしたら、「いい商品を」とか、「すぐに送付を」と期待することになろう。これらのことは、向こう任せのことで、傍観的にしかなれないことである。

「果物の実がたくさんなる期待」をもって、「肥料をたくさんやる」という場合も、結局は傍観的なのではないか。肥料をやった後は、関与せず待ち望むのみである。施肥が樹木の結実に対して影響を与えることはまちがいないが、「影響」にとどまる。影響は、ことの展開の本筋には関与せず、そのまわりからこれに肯定的か否定的な間接的作用をするだけである。いい肥料を与えたので勢いのある樹木になり（これは影響ではなく、直接的関与・作用である）、おそらくは、この勢いのある木（原因）は、いい結「果」をもたらしてくれるだろうと（木が花をつけ実を結んでいく、ことの展開の本筋は傍観するのみである。そして最後、果実はあまりならず「期待はずれ」となり、結実にとって施肥は否定的影響でしかなかったと失望して拒否的に傍観することになったりもする）、受動的に待ち構え、つまりは傍観的に、「期待する」ものであろう。希望は、この場合、不可能である。自然は、ひとの希望を聞き入れない。

（期待は、好ましい結果を予期し、これに構えをつくる）われわれの期待は、「待」を漢字においてもつ。この「待つ」ことが、期待の傍観者的態度をつくり、かつその対象を好ましいものにと限定するのであろう。「待つ」のは、働きかけることをしないで、相手がやって来るのを、それ用に身構えてじっとしていることであり、傍観者の態度に自己を限定する。また、待つのは、どちらかという、よいことを求めてのことである。いやな人とあうときは、あまり「待ちあわせる」とはいわない。待ち遠しいのは、好ましいものごとである。

期待は、帰結を予期するという知性の働きだけにはとどまらない。好ましい帰結をふまえた享受等への予めの構えをつくる。「ごちそうを期待しています」と言うのは、その帰結を相手もたらすことを待ち望んでいる場合であるが、そこでは、その求め願っている帰結の享受を思い、心身はその準備態勢に入って、もう口には唾液すら出しはじめる。期待は、知性が身近な先を見通すものだが、同時に、それが身近なそれなりに確かなことなので、欲求・欲望がかきたてられ、期待においては、心身はその帰結を当てにした享受等の構えをつくることになる。

### 3. わくわくする期待と胸ふくらむ希望

「期待」では、傍観者として因からその果を推し量っているのみだと筆者が言うことに対しては、受動的に帰結の享受にこころを躍らせるだけではなく、帰結以前の過程にも積極的に参与して、「期待では、ことの展開過程自体においてわくわくと興奮し、主体的であって、傍観者的というのはおかしい」と言われるかも知れない。だが、期待は、やはり、受動的で傍観者的というべきである。就職が決まりそうになり「期待する」者は、よい影響があたえられそうなら、そう働きかけることもなくはないが、それ以上に積極的なことはせず、普通には会社側に働きかけることもしない。わくわくしながら「待つ」のみである。「期待」では、「期待を自らがかなえる」とはいわない。希望は、自分が主体的に関与してその実現を求めていく能動的なもので、自身において「かなえていく」ことにもなるが、期待は、「自らがかなえる」ものではなく、受動的で傍観

的にとどまる。

**(期待は、観客の興奮)** 帰結の享受を思っただけではなく、期待する事柄の展開自体に「わくわく」して興奮する場合があるのは確かである。期待が主体的実践の姿勢をもたないのだとすると、この興奮はどう理解すべきなのであろうか。おそらくは、単なる傍観者でしかないテレビの視聴者が、ボクシングを見ながら殴り殴られているつもりになって興奮するのと同様のことが生じていて、わくわくするのであろう。競馬で一着を期待する者は、そのお目当ての馬か騎手になりきってしまう。感情移入するというか、それらと自他無差別状態になり、自身がその馬か騎手のつもりになって、興奮するということである。期待でわくわくし、期待に胸を躍らせるのは、現実の事態に自らが入り込んで対応しているのではなく、もっぱら想像のうちで、観客として、傍観者として、さらには、場合によっては呪術的に後退して真に働きかけているつもりにもなって、この思う方向への展開が待ち遠しいので、早く早くとこれに興奮しているのみではないだろうか。ひとの心身は、感情的には、想像で十分にその想像内容にと反応する。「彼らは共謀して自分を裏切ろうとしているにちがいない」と想像するなら、たとえ、それが妄想で曲解だと頭の隅で思っても、むらむらと怒りの感情が生起してくる。傍観的な、つまり見ているだけの観客も、自らを騎手に一体化させての想像で、十分興奮することになる。

**(帰結＝享受の不確定なことへの不安)** 期待では、因が現にあり、身近なさきに結果が予期できる状態である。日本の「期待」は、好ましい帰結のみを求めてのものだから、特に、その結果をもたらす好ましい担い手に想像的に一体化して、その一挙手一投足を共にするようにと誘われている。かつ、結果はなお与えられてはおらず未定であれば、ときに不安感にもさそわれることになる。興奮しながらも、現実的な確定した動きがとれず、そわそわすることとなる。

期待は、その帰結が確定的とみなされるものには、もたない(例えば明朝の日の出)。不確定さの残るものについて(明日の快晴)、これを見込み、期待して待ち望むのである。不確定・不確定ということが期待には本質的で、好ましいものの帰結を見込みはするものの、そうならないかということ意識を残すから、不確定への不安がなんらかの程度で伴う。一応は、期待するものがあると思っただけでその帰結への構えをとるのだが、そうならない可能性を残すので、この方への構えも残して置く必要がある。その期待の帰結がおぼつかないものであればあるほど、大切なものであればあるほど、慎重に万全の想定をして、あれかこれかと動揺し、不安にもなる。わくわくとし、かつそわそわと落ち着かないということになるのであろう。

**(胸をふくらませる希望)** 希望では、「わくわく」と興奮することは、例外的で身近な希望に限定されよう。はるかな先のことを望むのであれば、今の心身はそれには反応しにくいであろう。手段となる現在は犠牲になることも多く、そういう現在には「わくわく」するわけにはいかない。希望は、感情的には、はるかを遠望して「胸をふくらませる」ことがふさわしい。期待も喜びも胸をふくらませる。喜びは、獲得した価値あるものを前にしている。獲得を誇って胸を張り、ゆったりと深く息をして享受の準備をする。期待の場合は、まだ獲得はしていないが、獲得を見込んでおりその価値物の享受にと大きな息をして身構えるのであろう。享受にかかわる喜びや期待とちがって、希望では、目的の実現ははるか先であり、「胸をふくらませる」のは、かがやかしい目的に向けてみずからを高めていけることへの、手段となり犠牲となることへの深呼吸である。希望は、(未来の)創造に胸をふくらませるのである。未来への明るい展望のもとにあって、生動性ゆたかにエネルギーをみなぎらせ、深く大きな息をし、胸のうちの心臓ものびやかにゆったりと大きく鼓動し、目的

に向けて最大を尽くそうと「胸をふくらませる」のであろう。

喜びには、獲得した価値を享受することがつづくのみで、さらなる先を見る目は存在しないが、希望は、はるかな目標を望み見て、現実的には、そのための手段・犠牲に配慮しなくてはならない。希望は、未来のための現在の労苦に意義を見出して、これに尽力する。希望が「胸をふくらませる」のは、身体的にのみではなく、充実した苦勞と夢からなる多彩な未来の想像図にこころがあふれ満たされ「ふくらんでいる」のでもある。

**(希望は冷静)** 希望の未来は輝かしいが、その身体のある現在は単なる手段で犠牲となることも求められ、目的（希望の実現）ということでは、なお無であって、心身の現在からいうと、つらい面が多い。うきうきしてはしゃぐわけにはいかない。ただし、楽しみな未来に向かっていて充実しているし開放感をもち、のびやかで生き生きとしている。

はるかな希望は、日常的には概ね穏やかで静かである。実現の可能性のひくいこともある。不可能でなければ、希望するということがあり、希望をいだくはじめは、なお不可能に近いところにあるというような場合、到底、これに喜々としてはおれないであろう。さらに、希望の場合、しばしば、そのはじめには、恵みが少なく、ときには絶望や失意のうちにあることがある。その暗闇のなかであって希望の小さな星を見出しているのだとすると、期待のように実現を目前にわくわくするようなわけにはいかない。その地獄から抜け出して、苦難の道を一步一步、希望の道を広げ、希望のゴールへと近づいていくのである。希望の達成においては、すばらしいものが獲得されるのであるが、その途上においては、幾多の困難が控えている。全英知を傾け持続性をもってその可能性を高めていくのであれば、一時的に自律神経を興奮させて「わくわく」してみても仕方がない。静かに、しかし生動性にあふれて輝くのが希望である。

#### 4. 自らの努力で叶えていく希望—自力型の希望—

**(等身大の現実的理想としての希望)** 希望は、希い望みをお願いするものとしては、これを引き受けてくれる相手をふまえており、ひとに希望を託すことになる。かつ、希望は、なんらかの形で自分が希望＝目的に能動的にかかわって、これを自身でも実現していく。自分が実現するものということでは、とくに、自身の分限・能力をふまえることが必要となる。あまりにも要求が高いと、自分の能力では無理となり、最大限の苦勞をもってしても水の泡となる。希望は、「希う」ものとして控え目で、これをお願いする相手に無理を望まないということもあるが、他方には、自身の能力等を思っても、自己規制が必要である。

願望なら実現不可能なものでもよいが、「これが希望です」というときは、自分が実現できることをふまえている。希望は、自分にとり「希」な最高の願い・「望」みだという。最高のものであるが、自己にとって最高ということである。単なる夢とちがいで、希望は、受験や就職がそうであるように、自分が現にその実現に向けて全エネルギーを注いでいく。それがはじめから無駄と分かっているものに自身の心血の注がれるわけがなく、そういうものは希望の対象とはなりえない。等身大の希望がいただける所以である。

**(自由が、希望を可能とする)** 希望は、ひとがこれに関する自由をもってはじめて抱くことができる。死にたくはないと思っても、ひとは不死ではありえず、したがって、死なないことを希望することはない。願望や夢とちがうところである。早死にしないことは、或る程度自由にできるので、これは、希望の対象となる。必然的であったり、まったくの偶然にとどまってひとの意志・意



欲をうけつけない不自由のものは、希望しないし一般的には絶望もしない。その実現への自由、可能性があるから、希望するのである。

制度的にその社会で奴隷や農奴となっているものは、一生がその社会的地位にとどめられる。一生奴隷というと、一見「絶望的」と感じられるが、おそらくは絶望してはいない（絶望できないほどに絶望的な下位層ということになる）。自分の未来は、自由がなく、どうしようとも、一生が奴隷であることが決定済みである場合、騎士になるとか、王になることは、不可能であり、そういう階級への希望は、もっても、無駄である。夢としては描きえるが、現実的な希望としては、もちえない。希望しようと絶望しようとそういうこととは無関係に一生は未来のはてまで決定済みである。だとしたら、だれが、無意味な希望をもって、その不可能な希望のために現在を手段化して無駄に犠牲とし、しかも必至の絶望を味わおうとするであろうか。希望があるから、絶望も甘受するのである。ミス日本一になれず絶望するのは、その希望のもてる美人だけである。一般の者は、希望がないから、絶望もしない。

近代になると、個人は、自由な存在となった。社会的に自分の未来の地位・存在は、自分が自分で自分で意欲してそれになるということになった。こうして近代は、希望を、したがって、それへの絶望を大きな問題とすることになってきた。もちろん、奴隷や農奴も、社会的地位・階級は一生不変でも、各人の健康等の面では、自由をもっているから、その自由のある限りのところでは、その未来への希望を描いていたことには変わりない。しかし社会的に必然的に未来までが決定されて自由がないところには、そのことでの希望の余地はない。自由のあるところに、希望が可能となる。近代社会は、かつてからいうときわめて大きな自由をもった社会であり、その意味では、未曾有の希望の社会となったのである。もとより、その裏側は未曾有の絶望をもつ社会になったということでもある。

かつての社会は、過去によって自己を自覚することが多く、現代社会は、未来の自分の職業・地位等に対するはるかな希望で現在の自分を作るから、未来によって決定されるというようなことにもなる。希望が自己のアイデンティティを作る。不変の停滞社会は、過去の反復であり、過去がものをいうが、動的な現代社会は、未来が、希望が大きな意味をもつ。個としての人間について「実存の本質は、未来にあり、生成するものだ」とか「未来に自分の本質がある」と言えるのは希望に生きる現代人のもとでのことで、古代・中世の場合は多くは「過去に自分の本質がある」ことになっていた。

**（自身で叶える自力の希望）** 希望は、ひとに乞い願う契機をもち、希望の内容しだいでは、この他者に圧倒的なものを負うことがあるが、なんといっても、希望は、「自身が希望を叶える」のである。それには自由がなくはならないが、それがあからといって希望は成立しない。その自由を生かす、希望実現への「意志」「意欲」がなくはならない。自身の希望へむけての強い「意志」が求められる。いわば「自力」の努力が根本になくはならない。かなたの希望が希望する者の力を引き出すのでもあるが、意識して自らにおいて力を注ぎ希望していく姿勢が求められる。絶望の暗闇に輝く希望はひとの生をよみがえらせてくれるが、他方では、当人が積極的にこれを見上げていくのでなくてはならない。いくら輝いていても、うつむいていたのでは、希望は、見出せない。希望に向かって意欲を出していく主体性が、自力の努力が希望には肝要である。

希望は、努力によってその実現の可能性を高められる。希望の大学のその希望がかなえられるかどうかは、受験勉強をどれだけしたかにかかっている。第一、その努力で、希望のレベルそのもの

を高めていける。他力型の希望であっても、当人のそれへの意欲に負う面がある。乞い願うそのお願いを、相手が根負けして、その希望をかなえてあげようという気持ちになれるようにもっていくこともできる。極楽を希望して、「一心不乱」に「百万遍」も念仏すれば、極楽は無理だとしても、地獄の閻魔帳から名前の削除ぐらいはしてもらえる。

**(意欲の持続)** はるか未来に位置する希望の場合は、持続性が問題となる。その希望へ魅了され、その欲求が大きければ、そのときには、その希望の目的への前進は大きくなることであろうが、それが、長期にわたったものの場合、自然的に魅惑された状態はそうは続かないから、「希望に燃える」ことは一時的なものにとどまって、やがては、忘れられて、その達成は覚束ないものとなる。そういう点で、希望の意志を「客体化」することは意味がある。つまり、自分の希望を意志表明してそういう者として周囲から処遇されるようにしたり、希望実現のための組織に所属することである。音楽家になる希望をもったものは、音楽学校に入れば、その意欲を一時的に失いかけても、希望の持続が可能となる。希望の組織・団体は、希望実現に対しての妨害が大きいものでは、相互にささえ妨害に立ち向かうためにも効果的である。しかし何といっても、希望は、ひとが自らに実現するもので、希望の初志を貫徹しようという意志力・根性が肝心である。

**(希望における現在の解放・開放、充実、自己目的化)** ひととは、現在の無意味な苦勞・閉塞状態に耐え難いものを感じることもある。過去と現在のしがらみに束縛されて、先へと進んでいく意欲も奪われがちとなる。そのとき、希望がいだかれるなら、その未来の楽しみをもって自らを慰めることができる。何より、未来の実り・希望をもつことで、現在は、そのための意味ある手段となり、現在の犠牲は、尊い価値をもつことができるようになる。希望は、閉塞した無意味な現在を解放し、未来の方向へとその生のとびらを開放し、明るい未来にと生きることを可能にする。希望は、現在に自由を与える。

未来に希望を立てて生きることによって、受難も苦悩も、希望の希有の価値ある実りへと結んで、これを現在の充実の内容とすることが出来る。希望がないのだとしたら、到底耐えられないような犠牲を強いられることもしばしばであろう。希望は、それに耐えさせる。はるかな希望をいづく精神は、現在の犠牲の一步一步において希望への接近を感知し、手段となることに生きがいを見出し、その現在に、生の充実を感じることもなる。

さらには、希望の種類によっては、手段の現在に充実を感じるのみにとどまらず、その充実した生きがいのある現在が楽しいものになり、むしろ、これが自己目的化することもある。結婚とか旅行の場合、その希望の目的地よりは、途中の過程の方が楽しく充実していることがしばしばである。希望の目的は、ここでは単なる目標か終点になり、それへの道程・手段がむしろ主要な目的となる。そのうえ、手段の過程は楽しく生動性に満ち満ちていたのに、それに比して、その希望の終点は、期待はずれでがっかりとなって、失望ということになる場合も生じてくる。

## 5. 失望とその傍観的特性

**(期待はずれ)** 希望と期待の否定・反対として、それらの喪失として、失望がある。失望は、例えば、「かれには失望したわ。もっとしっかりしていると期待していたのに！」というように、期待を否定する場面でいうのが一つの典型であろう。期待していて、それが裏切られたときに、がっかりし、「失望」をいう。期待して、好ましい結果を見込み、予期して待っていたのに、それが、その思い通りにならず、期待外れで、その期待の「望み」が実現されず「失われる」のが、失望である。

(希望を失う) 失望は、「望み」を「失う」のだから、期待についてのみでなく、希望を失う場合もいう。希望の否定がもうひとつの失望の典型となろうか。「かれには、希望を託していたのに、失望した」と希望の否定を失望とすることがある。失望は、その対象を突き放し見下し、その対象に距離をとり傍観的になる。期待と同じように傍観的なことを基本とする。希望も、「かれに希望を託す」ような依頼型の場合、主体性よりは傍観性がきわだち、その否定は、これを突き放すのだから、一層、傍観的になり、期待はずれの傍観的な失望と齟齬をきたすことはない。

だが、希望は、自力で主体的能動的に取り組むものでもある。この希望の否定も「失望」となりうる。何年も司法試験に挑戦していて自身の実力のほどを知って弱気になり、「希望がもてなくなり、失望していった」等といえるであろう。この失望は、自力の希望の否定であるから、傍観的な失望とは一見合わない感じであるが、これもやはり傍観的になっているというべきであろう。自身の主体的な自力の営為について、これを否定するとは、これを突き放し距離をとって（つまり傍観的な位置に自身が離れ）、見下し、受け入れがたい気持ちになっているのである。自力型の希望もその否定ということでは、ほかの傍観的に突き放す「失望」のあり方と似たものになる。

(失望とは) 失望は、期待あるいは希望といった「望み」を実現できず、この望みを失って、望みの場所に帰結したものを無価値・反価値と評価し見下し突き放しつつ、力を落とし、がっかりすることであろう。予期し期待した好ましいこと（望み）が実現されず「期待外れ」になったり、希望の意志（望み）が挫折させられ「希望がもてない」状態になって、ひとは、「失望」する。

希望は、知的精神の実践的な営みであるが、希望のもとには、当然、価値認識がある。希望の対象は自身にとり最高の価値物との認識であり、未来の希望をはるかにと観望し認識している。この希望の認識面は、好ましいものを見込むものとして、広義には期待することだといってもいいであろう。希望のうちでのこの期待はずれが、希望における失望ということである。とすると、期待も希望も、失望は、「期待はずれ」にまとめておいてもいいであろうか。希望が対象とするその外延は、自由の人為に限定されるが、期待は、自然一般にもいう。その期待はずれの失望も、期待同様、自然に関するものを含む。宝石の原石について「大きい石を期待していた」のに、「小さな石ばかりで失望した」ということになる。

(「失望」と「がっかり」の違いは?) 「失望」は、しばしば「がっかり」という言葉にいいかえられるが、後者は、失望の心身の体験内容を示すのみである。これに対して「失望」は、「望み」を「失う」という、ひとの精神に起こった事の意味内容を示す。期待や希望の求めるもの「望み」が「失われた」と語る。「がっかり」感は、失望ではない場合もある。ゲームで失敗して、よく「がっかり！」というが、「失望する」ことは希れである。バスや電車に間に合わず「がっかりする」場合なども、ふつうには「失望した」とはいえない。これらは、良い帰結を見込み、求め、心身の緊張をさそわれていたのが無用となり力を落とす点、失望と同じだが、その緊張の元になるものは、「望み」といえるような高尚なものではない、ということであろうか。

では、同じく失望している事柄について「失望」と「がっかり」との違いはあるのであろうか。期待はずれの事柄には、すべて「失望」も「がっかり」もいえるであろうが、強いて言うと、「失望」は、人為に関する期待はずれに一層ふさわしいように感じられる。「かれに失望した」は普通だが、「雨に失望した」は、特殊なことになろう。「失望」が人間・人為にふさわしいのは、おそらくはその「望」のことばにかかわる。雨に失望するとしても雨自体は「望み」を意識できるわけではない。だが、人為の場合は、期待なり希望という「望み」を自他に自覚して行動する。期待はずれなこと

をしてしまった者は、その相手の期待、「望み」を意識し、これを裏切ってしまったと思うことであろう。「失望」がどちらかという人為に言われる所以である。

(- a (W) に、P に、失望する) 期待や希望は、「a (W) を、P に」(または「W を P に」) 期待し、あるいは希望する。両方とも、直接目的語 (W) と間接目的語 (P) を日本語の場合とはとる。だが、それらへの失望では「～に失望する」とのみいい、「～を失望する」はいわない。希望や期待では、「ダイヤ (W) を [贈ってくれること (a)] を、彼 (P) に希望する」とか、あるいは、期待は自然にもできるから、「あす快晴になることを、(秋空に、) 期待する」等という。これに対して、期待・希望が裏切られて失望するのであるから、まずは、この否定的なことの原因特定に向かい、「かれに失望する」と、ことの担い手「P に」失望することになる。だが、a (W) については、単純にこれをもって失望の対象とはしない。a (W) つまり「ダイヤ (W) を贈ってくれること (a)」に失望しているのではない。「ダイヤを贈ってくれなかったこと」に失望するのである。目の前にあるのは、否定の - a (W) である。失望は、期待・希望とちがって直接目的語「～を」は取らない。それを目的語としてあげる場合は、「ダイヤを贈ってくれなかったことに、失望した」と、「～に」をもってする。失望するとき、眼前にある対象は、- a (W) であるが、同時に a (W) が頭の中にある。この a (W) と - a (W) の両面を意識しつつ失望するので、単純に直接的に目的をさす「～を」にはしにくいのであろう、P と同様に、a (W) に関しても、媒介・距離をおいて否定的結果 - a (W) を間接的な目的表現にして、「～に」で言う。

(見下げる価値評価) 失望では、期待し予期した高い価値をふまえているが、そこに結果したものはそれを実現せず低い価値状態にとどまっていた、ひとは、その価値下落の結果を見くだすことになる。期待は裏切られて、「見損なった」と軽蔑的な眼をそそぐ。意外なその反価値・無価値状態を、傍観的に期待の高みから眺め、その求めるものがないと価値評価する。

期待通りなら、見込んだ、求め待ち望んでいた高い価値あるものが実現されて、望みは満たされ安堵することになるが、その期待のはずれたのが失望である。期待以上の高い価値が実現された場合も、期待からは、はずれるのだが、これは、「期待以上」となり、「望外」のもの達成となり、当然、「失望」などとはいわない。失望は、高い望みを予定していたのに、それがかなわず、期待の価値以下のものしか見出すことができず、がっかりするのである。

その高低を量化すれば、大きなプラスの「望外」、見込みにかなっているプラスの「期待通り」、さらに、可もなく不可もないゼロ、そこからマイナスの「不満」「期待はずれ」へと下がり、がまんを越えたあたりが「失望」になるのであろう。「期待はずれ」は、「失望」と同一とみてもいいであろうが、広くは、というか、軽いものは、期待の高みに至っていない並みのものが帰結している場合を含むであろうか。「絶望」は、望みの未来の道が完全に絶たれ閉鎖された暗黒の状態、失望などとは異質のさらに大きなマイナスになる。

(見離す) 失望は、単にマイナスにと見下した価値評価をするのみではなく、期待はずれの結果を受け入れがたく思い、排除しようとし、見限り見離す態度をとる。無価値・反価値化したものに対しては、愛などでは、これに近づき、一体化したり、価値回復を求めてこれに価値あるものを贈与するが、失望は、その期待はずれの否定的価値状態のものを見下すのみでなく、自分から遠ざけようとする。たとえ愛しいわが子であっても、失望しているところでは、これを突き放す。

失望の対象は、もとは期待していたものであるから、失望する前には、自ら好んで受け入れようとして、待ち望み、受容の構えをとっていたのである。だが、そこに結果したものは、期待に反し

て、軽蔑されるべきものでしかなく、受け入れを拒否する態度にと転換されることになる。失望は、その対象をつき離し、見限り、場合によると、それを見ることもほどほどに、目をそむけ、その空気がともにしたくないと鼻をしかめる。

**(落胆・喪失感)** 失望は、感情的には、喪失感に属した構えをつくる。期待は、すぐ先に予定したその享受等の楽しみ、それへの予めの構え、興奮・緊張をもつが、失望は、これらを解除・停止する。その緊張・興奮の解除は、単なる弛緩状態になるのではなく、その期待にかかわっての無力・虚脱状態をもたらす。落胆である。期待して待ち構えていたその欲求に関する興奮(希望の場合は、充実した現在の意欲的な活動)は、血流を盛んにするが、これを失望は解除し、生動性は無用となって血の気は引く。血流は全身において小さくなり、おそらく血圧も低下して、顔面は蒼白気味となる。息(=生)は、とどこおり、たまった息を「ふー」と(口も舌も脱力して出すhの音)はきだし、失望は、「ため息をつく」。享受等を見込んで興奮・緊張していた身体は脱力し、四肢は「がくがく」となり、「がっかりする」。

喪失感の代表は、「悲しみ」となるが、悲しみの場合は、典型的には、現に所持していた大切なものを剥奪されて、それを取り返すことが無理と諦念・断念しての、完全な喪失についての心身の感情反応になる。だが、失望の場合は、希望し期待した達成予定のものを喪失するのみであり、一般的な悲しみとは、異なる。悲しみでは、それ以上の喪失を阻止するためであろう、自己閉鎖することがともなうが、失望では、これはない。まだ期待(結果)の達成はしておらず自己のうちにはなお喪失するものは何も所持していないのである。獲得の可能性を喪失したのみである。

**(期待外れの失望は、終結感情)** 期待外れの失望は、結果が明確になった時点でいただく。この失望は、さきを見ない。現在を見るのみであり、その現在において、期待は裏切られたと宣言しているのである。喜び・悲しみが、獲得・喪失を確定していただく、いわば事の終結・終了の感情であるのと同様に、この失望も、事の終結の感情である。まだ期待の可能性が残っているのであれば、失望することはない。期待はずれは確定している。それにしたがって期待へのかまへは、無意味化して、その力は無用となり、力を落とし、しょんぼりとする。

絶望や悲しみは、事が確定し終結した時にいただくのみではなく、その後も持続する。そのことに関する希望・欲求が根底にあるかぎり、その絶望は、消えない。悲しみも、そのことへの欲求が存続し、愛しいとの思いがつづくかぎり、喪失感はずえ、悲しみは、これを思うたびにいつまでも反復する。だが、失望は、それらに比しては、持続性は小さい。というより、一回きりで終わるのがふつうである。現実には獲得はなく、期待した享受等の予定がかなわなかったのみで、その喪失にも、さして執着することはない。宝くじで一億円が当たったのに、その券をうかつにも燃やしてしまったとすると、思い出すたびに悔やまれてならず、その喪失感・くやしきは、相当長く持続することであろう。だが、三億円をと期待して奮発して200枚買っていたとしても、当るわけがなく、奮発していたのであれば外れと知ってがっかりし失望することであろうが、おそらく、その日のうちに、さっぱりと諦められるのではないか。「残念」ということになるが、残る念はわずかである。以後、思い出しても失望感が生じることはない。基本的には一回の失望感で終わる。期待での緊張した構えが無用になりがっかりしたのであり、次にそれを思い出してみても、価値ある状態の見込みは立てないしその期待の結果への享受の構えはつくらないから、それを解除してのがっかり感・失望も出てこないのがふつうであろう。希望の場合は、享受の構えではなく、手段としての現在の充実した緊張があるのだろうが、これも失望すれば、その方向での希望の展開は見限り、その

緊張＝活動を繰り返すことはないから、その失望も反復することはない。

失望は、不快だが感情として持続せず、苦悶させる絶望などちがって、失望の感情そのものから解放されたいと思うことはあまりない。失望における価値評価や落胆は、心地よいものではないが、失望した主体は、基本的に傍観的であり、失望の対象を見限り、受け入れがたいものとして放置するだけのことである。以後は、それがかかわってくる場合は、かつて見込んでいた価値づけをせず見下されたものという評価をもって対応すればよいだけであり、「残念」との気がかりは、その程度残るにすぎない。

**（失望は、希望を一層よい方向に高めていける）** 希望に関する失望では、根本にある希望自体は残している。失望の元を取り除いて、再び、その同類の希望を復活させることが可能である。失望は、望みを失っているというが、それは、絶望でなければ、至近の手段が期待はずれで展望をもてなくなっているのみである。それを取り除き、希望自体は、復活可能となることが多い。

失望は、同じものについては一回きりの体験をして終わりであり、希望は、それを見限り、新規の担い手・手段を見出して、よりましな方向へと同一か同類の希望を進めていくことが可能となる。恋人Aに失望したものは、これを見限り、新規にそのAの欠点をもっていないよりすばらしい恋人Bをさがすことになる。教団Xに失望したものは、その浅薄な教義を凌駕する教団Yにと宗教的希望を託し変えていく。宗教自体に失望すれば、非合理的な知としての信ではなく合理の知へ哲学へと高まっていける。失望してよかったということになる。

## 6. 希望に燃える

**（燃える希望と、燃え得ない希望）** 期待では、いくら興奮しわくわくしても、「期待に燃える」ということはできないが、希望では、「希望に燃える」ということがある。しかし、ひとは、どんな希望にでも「燃える」わけではない。生き埋めになって救出の可能性が少なくなっているとき、その「残されている希望」には、いくら懸命になっても、「燃える」ことはできない。その希望の内容、その深刻さが、燃えて輝くような状態になることは押しとどめるのであろう。

日常的なささいな希望についても、「燃える」ことはない。「夕食の希望は、さんまです！」という場合、たとえ夕焼けと秋刀魚が燃えたとしても、その希望は燃えない。燃えたのでは、ささいでなくなってしまう。その類いの希望は「楽しみ」にする程度であらう。それがよほど楽しみであれば、「うきうきする」希望にはなるであらうが、「燃える」ことは、ない。

**（その人をつくる自力の希望に、燃える）** その希望の内容が重要な価値をもつ場合になると、「燃える」ようなことになるのであろうが、それでも、その希望がもつばらにひとに請い願うもので、自身は、「待ち望む」だけにとどまる場合は、「燃える」というには、届かない。お土産に「ダイヤモンドの希望」をかなえてもらえるといった、それが大きな期待を呼ぶものには、「わくわく」したり、あるいは、「胸をふくらます」ことになる。しかし、いくら胸を躍らせるような大きなダイヤモンドであったとしても、そのことでの希望は燃えるものではないであらう。依頼・受動型の希望には、燃えるには欠けるものがあるのであろう。そこに欠けるのは、能動的に自身でかなえ実現していくという契機である。

「燃える」ことになるような希望は、大きなもので自身がその実現に参与する、自力が主となった希望になるのであろう。希望主体が、それに生きるような、生きがいそのものとなるような希望である。これに己を燃やし尽くすことができれば、本望であるような希望である。自力であれば、

登山とかの楽しみ・消費活動であっても、燃えることがありそうであるが、心置きなく燃えるには、やはり、創造的な活動となる希望が一番であろうか。

（「燃える」とは？）「燃える」というのは、「火が燃える」のがもともとだろうが、勢いがあり動いてやまず、熱くなって輝き、激しく盛んな状態になっている心身のあり方をいう。激しく勢いがあるということでは「怒りに燃える」「復讐に燃える」等の攻撃的なひとの態勢は「燃える」というにふさわしい。「燃える」のは、興奮し活動的になり外向きに何かに向けてそのエネルギーを集中し注いでいくことであろう。筋肉や一部の内臓が興奮して動的になって血流が多くなり、体温も上昇する。攻撃でなく、激しく情熱的ということでは、「恋の炎を燃やす」「恋焦がれる」等の愛もある。希望も、人生そのものを構成するようなものは、こういう、激しく盛んなものの様相をもつということである。

勢いがあり、盛んである「燃える」状態は、人生をうごかす希望では大いにありたい様相である。大きな希望をもってこれに生きるものは、絶望・失望の意気消沈している状態と反対で、その生動性において盛んであり、その目標に向かって勢いをもって生きていくものであろう。はるかな希望＝目的に到るために現在の自己を尽くし、自己犠牲を厭うことなく、気力を盛んにして、それへとまっしぐらとなり、燃えて生きる。

希望の場合、その「燃焼」では、光り輝き、明るく照らすことがひとつの特徴になる。復讐の情念に燃える場合は、くすぶったり冷たい青い炎を燃やすのであろうが、はるかな希望は、輝き明るい炎を燃やす。希望の目的が未来のあなたに輝いていて、これがひとを魅了し導きの星となることがあり、それを目指して躍動的に生き生きと燃えて、希望は、この現在自身を輝かせる。ドイツ語でも、「希望に燃える *gluehen vor Hoffnung*」ということがある。*gluehen* は、灼熱・白熱の状態になる燃え方のようなものである。希望は、くすぶることなく、明々と燃えて輝くのである。

（「燃える」ものとしての現在）「希望に燃える」のは、「希望が」燃えるのではない。燃えるものは、では何になるのであろうか。はるかな未来にと希望をいだける当人の「現在」の生が燃えるのであろう。それが、その未来の目的にむけて、その実現に資するようにと、その生を燃焼させていくのである。未来の希望の輝きも、この現在の自己が燃えて可能にする。はじめは誰かが希望の星を与えてくれることがあるが、一旦、自分で希望の火を灯したら、以降は自分でそれを守り続けるのである。もし、現在が燃えず、その未来に希望を描き出さないならば、希望は、実現可能性を失い瞬くことをやめる。あなたにかがやく希望であるが、それを輝かすのは、燃える現在である。

その現在は、未来の希望（目的）の手段・犠牲となる。未来のために、希望の目的に向けて、現在を燃やし役立てる。現在を灰にしてそのエネルギーを未来の希望にそそぎ、死んで生きる。「愛に燃える」場合は、その現在に目的を実現して、つまり愛（一体化）を実現して終わる。だが、希望の場合は、現在は、手段となり無化するのみであり、希望という目的の実現は、はるかな未来になる。その未来へと自身を投げ出し、燃やし尽くすことでその希望は現実化してくる。

（希望の燃え方）ひとが燃えるのだが、希望には、それ固有の燃え方がある。怒りや愛が燃える場合は、その主体は、理性や精神であるよりは、その感情が中心になろう。感情的なものであるから、身体が燃えるのでもある。怒りに燃えるひとは、実際に身体が熱くなり、血気盛んになって顔面は紅潮する。怒りの形相をもつ不動明王の光背は炎をもって示される。愛も性愛では、そういうことになる（日本の「愛」は、どうしてか崇高さに欠ける。「仏を愛する」「神を愛したい」などという一愛が下品なためであろう）なにか猥雑な感じになる）。これらは、その攻撃とか一体化の有り様

が身体的なものになるから、身体が燃えるのである。だが、希望の燃え方は、ちがう。意志・意欲といった高貴な精神的な能力が燃えるのである。希望に燃える場合は、身体的に熱くなることはない。意欲・気力が勢いを持ち、盛んとなるのであり、英知を動員してはるかな未来に向かって力を尽くしていこうとするものである。

希望の燃える熱とか輝きは、精神的であり、その炎・エネルギーの向かうところは、はるかな未来の理想である。怒りや愛は、現に存在している対象に激しくそのパッションをぶつけていくのがふつうで、現在に終始するが、希望は、燃えることで、はるかな未来の時間を展開する。その熱と光は、精神が英知を発揮して活発に働き覚醒する状態をもたらすことになり、その営為を現在から未来の方向へと向けて時間の流れのなかにおき、その時間を滞らせることなく滑らかに倦まず弛まず前にと進めていく。愛や怒りは、現在のもとで燃え尽きるが、希望は、ロケットの燃焼のように推進力となり、その炎は、はるかに燃えて、未来の時間のなかに持続していく。未来へと燃え広がって、希望の達成まで燃え続けていく。

(希望は、萌える) 希望に燃える状態は明るく充実しており、それはその希望の主体の動物的生の下位層(食欲など)から幸福感をいまく精神の層までを輝かせその生動性を汎化させて燃え広がっていく。その現在は、未来の希望の手段であり、希望達成ははるかかなたで、いまだ未熟の状態にあって、なお芽生えをもっているにすぎない。燃える現在は、燃えて灰となり消滅して未来に生きるのであるが、希望の場合、現在は犠牲的でありつつも明るく生き生きとしていて、そのかなたに希望の目的の果実が予定されているという点からは、「萌える」(緑に燃える)という方がふさわしいかもしれない。

愛に燃え、怒りに燃える場合は、その現在にすべてがある燃え方になることが多いが、希望が燃える場合は、そうではない。冷静に英知を駆使してその意志と情熱をかたむけるが、楽しく燃えて現在に充足するのみでは未来の希望は、影を薄くする。今(の愛)に燃えるのみでは、未来の(新家族形成の)希望は、おぼつかない。希望に燃えるばあい、現在は手段になり苦勞をし犠牲になるものとして、その燃える現在は、未来の希望=目的にひたすらな姿勢をもっていなくてはならない。

「萌える」場合、それ自身に充実しつつ、なんととっても、はるかな成長・結実を目指している。希望には、こういうあり方がふさわしい。明々と「燃える」希望は、かがやいて、芽吹き、「萌える」のである。

(西日本応用倫理学研究会 『ぷらくしす』 通巻 第9号 2008年3月)